特集：社会人大学院

特集：社会人大学院

大学図書館員にとっての大学院：その意義

鈴木　正紀

最新の『図書館年鑑』(2011年版）で確認できる図書館情報学系の大学院は、大学単位で数えると14ある。それに2011年度に開設された九州大学大学院統合新領域学府のライブラリーサイエンス専攻を合わせると15を数える。筆者が（社会人ではなくフルタイムの大学院生としてだが）大学院修士課程に在籍していた当時（1990〜1991年度）の『図書館年鑑』(1990年版）によるとその数はわずか3つであった（図書館情報大学、慶應義塾大学、東京大学)。その後、20年余が経過したが、随分と多くなったものだと思う。現在、それらの大学院に少なくない現職図書館員が通っており、筆者の友人、知人にも仕事を続けながら大学院に通い、修士号を取得した人は何人もいる（博士号を取得した人もいる)。時代は大きく変わってきていると思う(大学院修了、ということの社会的な意味も含めて)。

とりあえずこの文脈で言っておきたいことは，そうした人々の修士論文（あるいはそのダイジェスト版としての雑誌論文でもよいが）が多くの人の目に留まることを希望したい。その論文の多くは、当事者が仕事をする中で問題としてとらえたことを、何らかの方法で、研究という形で一定の解釈をし、改善の足掛かりにしようと考えたと思うからである。そうした経験の共有は、大学図書館界の財産にもなると言えるだろう。一方、現職者の大学院経験についても、それがどのようなものか、どのような意味を持つのかを記録として残してもらいたいと思う。この特集はそうしたことを意図していると思うが、これまでは、筆者が知る限りでは、『情報の科学と技術』に掲載された2本の記事が大変参考になると思っている[(1)(2)]。ぜひそちらも読んでいただきたい。

さて、この小論では、現職者が大学院に行くことの「意味」「意義」について私見を述べることが目的である（しかし、その過程で、現在の大学院の「問題」にも触れざるを得なくなるだろう)。ここでは、主として修士課程（及び博士課程前期）を対象とする。

上で述べた九州大学のライブラリーサイエンス専攻設置記念シンポジウムでの発表資料にあるとおり、図書館情報学教育における大学院教育の位置づけは図1で明確に示されている[(3)]。

この図は、これまで日本へもよく紹介され

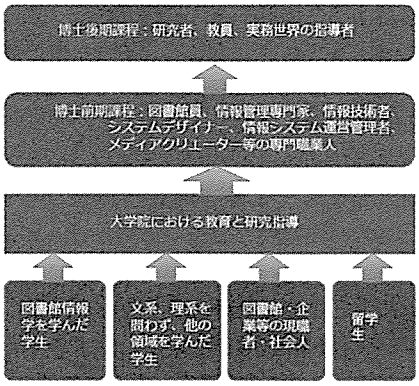

図1

た、米国の図書館員養成プロセスの現代版ともいうべきものを示していると言えるだろう（進路はすでに図書館だけではなくなっている、という意味で）。

しかし、形式的には米国のようになった（近づいた）としても、問わなくてはならないのは大学院の「中身」であろう（それは、カリキュラムに端的に現れる）。

現在の日本では、「大学院」は2つの系統に分かれる。ひとつは従来からある大学院で、主として研究者養成を目的とする大学院（それは修士課程の上に博士課程、現在では、修士課程を博士課程前期、博士課程を同後期、とする例が一般的である）、もう一つは、2003年度にスタートした専門職大学院である。

専門職大学院は、「大学院のうち、学術の理論及び応用を教授研究し、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とするもの」のことである（学校教育法第99条第2項）、とされる。（傍点は筆者）

筆者自身は大学院生生活を2度経験している。最初は冒頭に述べた図書館情報大学（現筑波大学）の修士課程（1990～1991年度）であり、2度目は現職者として筑波大学博士課程後期（2004～2008年度）である（これはすでに退学をしている）。1度目のころ、大学院にはこうした区別はなく、もっぱら座学中心で、原書講読、授業のテーマに関係のあるトピックのレポートとディスカッションといったものが中心で、図書館の現場でのハイレベルな業務の遂行やその改善に直接資する内容の授業はなかったと言ってよい。研究者養成を想定したカリキュラムのままだったのである。当時あった他の2つの大学院のカリキュラムを調べる余裕はないが、専門職大学院という制度が存在しなかった時期だけに、大差はなかったのではないかと思われる。そして大学院の教育内容は、現在もそう大きくは変わっていないのではないだろうか。現在15ある図書館情報学系大学院のカリキュラムを調べたわけではないが、図書館員養成の場としての大学院ということであれば、それは理論的研鑽と実務遂行能力の向上に資する専門職大学院でなくてはならないだろう（とりわけ修士課程、博士課程前期は）。そうした意味で言うと、九州大学ライブラリーサイエンス専攻のカリキュラムには、演習科目がいくつも組み込まれており[(4)]、従来とは異なった教育を志向しているのではないかと推察される。残念ながら実情について筆者は把握していないが。

しかし、ではそうした座学ベースの大学院は意味がないのかというと決してそんなことはない。現職者がこれを経験することには大いなる意味がある。それは以下の点においてだと筆者は考える。

①修士論文を仕上げるということで研究のプロセスについては学部生以上の深い経験をすることができる。
②図書館に関する大きな枠組みについて授業等を通じて知ることができ、広い視野を持つことが可能となる。
③図書館現場の課題と図書館情報学の研究の成果をつなげていこうという志向が出る。

修士論文は、誤解を恐れずに言えば博士論文と異なって、（とりわけ現在は）一定のプロセスをたどればほとんどの大学院生が書きあげられるものであろう。社会人大学院生であれば、論文を書くための何がしかの材料は自らの職場にあるわけだから（材料＝課題があってそれを解決するために大学院に進むのだろうから）、それを料理する方法さえ見つければ、十分な成果は得られるだろうと思う。しかし、それは学部の卒論などに比べて果てしなく長く、しんどい努力を要するものであることも事実である。こうしたプロセスを経験することが、現場における「研究の理解」ということにつながる。職場の顧客である大学院生や研究者の研究に対する姿勢や、資料・文献を求めることについての切実さをわがことのように理解することができるようになるのだと思う。筆者自身、修士論文を書く過程で、米国で発行された会議資料が必要となり図書館に相談をしたところ、図書館の人がそれを見つけ出して取り寄せ提供してくれたという経験を持っている。NACSIS-ILL などまだない時代、インターネットも萌芽的でしかなかった時代である。このときの感謝の念が今の自分の基本姿勢を形作るひとつの祖形となっている。

大学院の授業は座学中心であることを上で批判したが、しかし座学で取り上げられるトピックは、図書館情報学や関連領域の学問的成果の、あるいは図書館という現象の先端的（あるいは根源的）事項・情報であることが多い。そうしたことに触れることにより、現場で得られる断片的な知識や情報を体系的に整理することができるようになる。

（図書館情報学を専攻した人に特に当てはまることだと思うが）図書館の現場に入ると、そこが図書館情報学の理論の成果よりは経験則にかなりの程度支配されている世界だということを感じた方は少なくないのではないだろうか。大学院で研究生活を経験した者は、そうしたことに対する「抵抗」を覚える（覚えてしかるべき）と思う。一般に、医学や法学に見られるように、また最近では教育学や心理学、工学などに見られるように、専門職というのはそのよって立つ学問的バックグラウンドがあってこそ専門職と言えるのであり、日常の業務が単に日々の積み重ねによる経験則でのみ遂行されるようであれば、それは専門職としての要件を欠くことになる（ベテランの経験を尊重することはもちろん大切なことだが）。現場の課題を解決するために、隣接領域の成果を含め（図書館情報学は学際的学問領域と自らを称している）、貪欲にそれらを使いこなすことによって、高度な成果を上げることができるようになるのではないだろうか。

あと付け加えるとすれば、社会人大学院生は大学院でたくさんの、志、熱意のある同業者と知り合うことができるだろう。このことは畠山氏も書いていることだが、こうした人とのネットワークは現場で仕事をしていく上でのかけがえのない財産になっていくと思う。職場ではルーチン化した、固定的な人間関係の中で仕事を行っていかざるを得ないが、それはある種の（マンネリに陥りやすいという）リスクを含んでいる（図書館員は内向きになりやすいと思う）。同業他者、あるいは同業ではなくとも隣接業種の他者は、新鮮な情報を提供してくれる、そして自分も相手に対して情報を与えられる人になりうる。

筆者の社会人大学院生としての経験は、すでに述べたように、筑波大学の博士課程後期での経験である。入学しようと思った動機は、ひとつには自分が業務上考えることが多くなった図書館組織の問題点を先端的なレベルの研究という俎上で考えてみたかったこと、もうひとつは、図書館情報学の「リサーチフロント」がどんな状況なのか、それが「博士」という学位を目指す人々の間でどう扱われる

のかといったことを自ら体験してみたかったことにある。それは修士課程での研究経験とはまたひとつ違ったものになるのではないか、と思ったのである（事実、違っていた）。けっして当時はヒマなわけではなかったが、業務に埋没する「マンネリ化」を恐れたことも理由の一つと言えるだろう。

目に見える成果ということでいえば学位はとれず、今後もその見通しはない。その意味では成果はなかったと言えるのかもしれないが、ゼミでの他の学生の発表を聞いたりすることにより、今、図書館では何が大切なトピックとして存在するのか、それに対してどういった解決を図っていけるのか、ということについてのいくつもの芽のようなものを受け取ることができたと思っている。これは現場と研究の接点、といったことで考えることができるだろう。

最後にひとつ。

大学院で研究をするということは詰まるところ個人的な問題である。しかし、そこで得ることのできた経験や知識、スキルを個人の、また職場の範囲にとどめておくのではなく、より広く、「図書館界」という世界で共有することはできないものだろうか。大学院を経験する、その良質の部分は、月並みなことばでいえば「世界が広がる」ということだと思う。その広がった世界を、人的ネットワークを形成することでより豊かなものとしていくことはできないだろうか。

大学図書館界の「変革」の必要性がそこかしこで言われ、私たち図書館員の存在価値が問われている今、「協働」のネットワークを作ることにより、そうした動きを活性化していくことができればと考える。

(1) 酒井由紀子．北米の図書館情報学教育の現況．情報の科学と技術．52(7)．354-363（2002）
(2) 畠山珠美．社会人大学院生の意義．情報の科学と技術．59(2)．65-68（2009）
(3) 植松貞夫．図書館情報学の未来：九州大学の新専攻に期待する．2010.12.18. https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/bitstream/2324/18802/1/uematsu.pdf (last access：20111025)
(4) http://lss.ifs.kyushu-u.ac.jp/?page_id=61 (last access：20111025)

（すずき・まさのり／文教大学越谷図書館）